

書 評

戸田美佳子.『越境する障害者—アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』明石書店, 2015 年, 224 p.

中村沙絵*

「地域でふつうに暮らせる社会へ」という障害者自立運動の理念は、私たちの社会にあっては永遠の課題であるようにみえる。一方で、本書に登場するアフリカ熱帯林に暮らす障害者たちは、「地域でふつうに暮らして」いるようにもみえる。これをどう考えるべきだろうか。本書に描かれているのは、私たちが目指すべき社会の姿（私たちの未来）なのだろうか。あるいは伝統的な相互扶助が残る「前近代社会」（私たちの過去）なのだろうか。著者はきっと、そのどちらをもいささか単純すぎる理解だと退けるだろう。「車いすを手に入れるために 10 年以上の年月を要した」（p. 53）インフォーマントたちの傍で短くない時間を過ごした戸田にとって、安易な理想化が現実を見えにくくしてしまうことは、誰よりも痛感するところであったはずである。

本書は、アフリカの障害者の現在を活写する作品であり、それを決して理想化するものではない。ただ、調査地で遭遇した現実を仔細に記述することで、私たちのものの見方を省察することが本書のひとつのねらいであることは確かである。それは、本書の問題設定

にもうかがえる。戸田は、障害者運動とそれに端を発する障害学の功績、すなわち「障害 [を] 個人的・身体的な悲劇（インペアメント）とみる見方から、社会的構築物（ディスタビリティ）とみる見方へ [の] 転換」（p. 21）を評価しながらも、日本での障害やケアをめぐる議論につきまとう、ある種の「息苦しさ」の存在を指摘する。この息苦しさの根源には、たとえば「差別しまいとする差別」というかたちで、障害者を「カテゴリー化」することから逃れられないような私たちの認識・態度があるという。本書の目的は、アフリカにおいて指摘されてきた「隠された障害者」像や「ケアしないアフリカ」のイメージを覆すと同時に、こうした『カテゴリー化に抗する』方向性を見出す」（p. 26）ことにあるのだ。

そこで本書が着目するのが「生業とケア」である。これは、日本をはじめとする後期近代社会での研究のように、「ケア」（それがどう定義されるものであれ）がなされるべき空間や役割関係が前もって設定され、そこでの相互行為が分析対象となるのとは異なる。戸田の調査地において障害をもつ・もたないにかかわらず展開している活動とは、環境から資源を得て暮らしを成り立たせる営み、すなわち生業である。著者は、生業の維持を基礎づけるような具体的で観察可能な相互行為を「ケア」と定義することで、障害者たちの生活や、彼／彼女らが形成する関係性を包括的に描き出す。その描出は、以下の順を追ってなされる。

まず第 1 章では、「ピグミー」系採集狩猟

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

民であるバカと、焼畑農耕を営む複数の農耕民が居住する調査地の概況が述べられる。カメルーン東部州に位置する調査地は、首都から車で2〜3日はかかる奥地である。だが、19世紀後半以降の西欧列強による支配、定住化政策、現金経済の浸透といった歴史的経緯のなかで、バカの人々は遊動生活から定住化への途を辿り、商品経済が浸透した「ポスト狩猟採集民社会」ともいえる状況を生きている。数千年も前から「アンピバレント」な関係を保ちつつ暮らしてきたというバカと農耕民の関係様式も、極めて現代的なものとなっている。これをふまえ、本書の主なインフォーマントの4人の家族背景やひととなりを紹介される。

第2章では、調査地における障害のフォーカスモデルと、西欧的障害観の移入について述べられる。調査地では、障害は治療の対象とされないか、なったとしても他の病気と同様に（呪術師／医師による）治療対象とみなされるなど特別な扱いを受けていない。身体の機能的障害を指す現地の言葉はあるものの、それは障害をもつ人を総称する語としては定着していない。むしろこの事態も変わりつつある。キリスト教の布教活動にともなう慈善活動は「障害者（les personnes handicapées）」という枠組みをもたらし、現代の政府による介入によっても障害の特別視という状況は浮上しつつある。それでも、調査地における障害観はいぜんとして、障害を「特別な対処が必要な状態」というよりは「差異」として認識するものであり、人々の関心はそうした差異をふまえて「ここ（村）で共存するこ

との方法を探」ることにある、と戸田は述べる。

この「共存することの方法」は、第3章「障害者と家族一居住形態と婚姻関係」でまず具体的に示される。もともと農耕民とバカのあいだには婚姻の忌避がみられ、障害者もその規則に従うのだが、障害をもつ人々、特に障害者の女性の既婚率が低いことは、身体的障害が婚姻に際して何らかの障壁であることを示唆している。ただし、これは彼女たちが孤立することを意味しない。多くの障害者女性が、未婚であっても養子をもらうなどして「母」となり、父系制でまとまる居住集団のなかに身をおいて生活するからである。この集団は自らがその一員として生業に関わったり、日常生活で手助けを得たりする最も身近な場でもある。ただ留意すべきは、ここでの「家族」とは、先行研究でいわれてきたように、障害者のケアを生涯担う唯一の担い手として固定化されてはいないという点である。

家族内部で世話をめぐる緊張が生じないのはなぜだろうか。第4章では、生計活動や日常生活における手助けを「誰」から、またどのように得ているかを検討しながら、この問いに答えている。ここで明らかになるのは、①労働が規格化・標準化されていない文脈では、身体的障害は障壁とは認識されづらく、むしろ「農耕民／バカ（雇用する側／される側）」「女／男（自給作物栽培／換金作物栽培）」といった属性が労働の選択に影響すること、②こうした既存の社会・経済関係に組み込まれながらも、集団間を「越境」することによって、多くの障害者は生計を立てて

いること、そして③日常生活における手助けも、生業が営まれる空間（それは同時に、遊びや学びの場でもある）のなかで、世帯構成員に限らない人々の関与のもと成立していること、である。

結論では、カメルーン農村の障害者の社会性とは何かが示される。生業活動において、障害の程度に応じて自分にできることを任される成人期の障害者は、当該社会において明確に境界づけられる「狩猟採集民」／「農耕民」の一員として（そのなかの「女性（母親）」／「男性（長老、家長）」として）ふるまうことで、「一人前」な存在として他者に対峙する（共同性）。ただ、彼らが生計を維持するためには他者からの手助けを要し、その対価となる資源を獲得する必要もある。そこで、集団間を越境することが重要な戦略となる。このとき顕在化するのは、局所的な対面交渉の場面のなかで他者を理解し、関係を紡ごうとする姿勢・能力である（対等性）。このように、調査地における障害者の社会性とは、集団範疇に付随する役割規程から完全に逸脱することなく、しかしときにそれを超えて、非対称的な役割関係を「ないもののようにして」（p. 180）対面的な相互行為に取り組む姿勢によって担保されている。この理解にもとづき、最後にさまざまな差異を前提とした共存社会とはいかなるものかについて、著者の見解が述べられる。

障害をもつ人々も、我々と同じように自立した人間として生活を送るためには、何が必要とされるべきなのか。戸田も指摘するように、障害学においてこの問いは繰り返し議論され

てきたし、そのための制度も、障害者自身が年月をかけて勝ち取ってきたという経緯がある。けれども、ここで忘れがちなのは、障害をもつ者もそうでない者も、普段からさまざまな（しばしば非対称的な）関係性のなかにおかれている、という事実である。私たちは集団のなかである役割を担い、それなりのふるまいを身につけていく。けれども具体的な状況においては、そうした役割に拘束されずに、相手の働きかけに応じて行為を選択することだってできる（ある人が一人前の介助者でありながら、海外からやってきた障害者のすすめでタクシー代をおごってもらうことも（きっと）できたように（p. 152））。障害者と非障害者、農耕民と狩猟採集民などの差異にもとづく「共存」を考える際に私たちが改めて着目すべきなのは、（差異をどうなくすか、ではなく）差異を前提としたときの、この対等性という行動原理なのではないか。そう本書は読者に問いかける。

以上のように、本書の主張は普遍性をもつものであるが、「非西欧社会／西欧社会」という対立構図がこれを見えにくくしている感も否めない。地域社会はひとつの総体としてまとまりをもった完結する実体であり、慈善や福祉や開発はそれに外在する異質な制度である、とするような見方は、それらがすでに現地社会の内部にあって人々の生活を構築している（たとえば、ジュネは施設で幼少期を過ごしている）ことを捉えきれないだろう。また、西洋発のケア概念が思いやりや愛情と過度に結びつけられてきたとの指摘はまさにそのとおりであるが、ケアについての議論が

しばしばその哲学的根拠として引き合いに出すハイデガーの *sorge* は存在論的な概念であって「他者への深い思いやり」(p. 155) を意味するものでなく、この意味において「顕在化」するものでもない。非西欧と西欧(西洋思想)の隔たりを強調しすぎることで、アフリカの他者性が際立っているのではないか。「他者(第三世界)研究」とみなされては、この本の魅力は十分に伝わらない。本書の魅力は、「ふつうの」人々の視線、対面行為というミクロなレベルから従来のもののやり方を省察する際の、地続きの視点を開示するところにあると思うからである。とはいえ、調査地の人々への誠意と、徹底的に経験に根差した思考によって(特にコラム④から続く結論での考察は秀逸である)、本書は魅力的な民族誌となっている。都市部へも調査の範囲を広げている著者が、今後アフリカと我々の関係をより動的に描き出してくれることを期待してやまない。

鈴木佑記、『現代の〈漂海民〉—津波後を生きる海民モーケンの民族誌』めこん、2016 年、348 p.

和田理寛*

漂海民、家族で船上に暮らし零細な漁業で身を立てながら海を漂う人々。狩猟採集だが主食等は陸地社会に依存し、商品となる海産物を採捕して市場と繋がる。この独特な生活様式は、瀬戸内海や九州から中国南部、東南

アジア島嶼部、インドシナ半島西岸に面するアンダマン海まで広がる。本書が取り上げるモーケンは、このうちアンダマン海にて、北はメルギー諸島から南はタイ・マレーシア国境周辺まで、海と島々を移動し生活してきた人々である。まとまったモーケン研究書としては、本邦では宣教師ウアイトの邦訳本[ウアイト 1943 (1922)]に続く刊行となる(本書の基になった鈴木[2011]を除く)。また、著者自らモーケンと生活を共にし、ナマコ採捕の体験などを通して書かれた質感豊かな民族誌である。

本書を読んで浮かび上がるのは、外部社会の影響を受けやすい漂海民の姿である。英領ビルマ時代のモーケンは家船での移動生活を送りながら、一方でマレー人の海賊から逃れ、他方ではナマコやツバメの巣、夜光貝などを捕まえて華人やマレー人の商人との物々交換に携わってきた。戦後は鉱山労働や真珠母貝の採捕にも従事している(本書第 5 章)。さらに現在は、漂泊生活をやめ、他地域の漂海民と同様、陸地への定着が進んでいる。そのため、第 6~13 章は、モーケンがどのような経緯で定住し、いかに外部社会の影響を受け、またそれに対応しているか、という内容が中心である。

ならば今や漂海民ではないではないか。そうした現実との齟齬を考慮して、本書は「海民」という言葉を代わりに用いると主張する(本書第 2 章)。ただ、評者としては、海民では対象が広すぎる感もあると思う。過去との連続性を意識した漂海民という名称を用いるか、それとも実態に即して漂海民という枠

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科